

宮沢賢治とヘンリー・ソローの比較研究：その思想と実践について

松原，留美

<https://doi.org/10.15017/2348697>

出版情報：九州大学，2019，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：



氏 名 : 松原 留美

論 文 名 : 宮沢賢治とヘンリー・ソローの比較研究 ―その思想と実践について

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

宮沢賢治とヘンリー・ソローは、ともに自然と積極的に関わり、著作の中で自然や自然と人間との関係を重要な素材として取り上げた作家である。本論文の目的は、こうした共通点が見られる両作家について、著作の内容や伝記的情報をさらに詳しく比較検討することによって、自然観や自然と人間の間に関わりについての考え方、あるいはそれらをもとにした実践的な側面の共通点と相違点を浮き彫りにすることである。こうした考察を通じて、両作家のネイチャーライティング的な著作の特質を明らかにし、また、人間と自然環境の間に関わりを考える上で有益な示唆を得ることができると考えられる。

序章では、本論文に関係のある先行研究を概観し、また、それらと本論文の問題設定の違いについて確認した。両作家のそれぞれについての先行研究は膨大であるが、両作家を直接に比較した研究はごくわずかであるため、本論文によって、この領域における学問的寄与が見込まれることを確認した。

第一章「宮沢賢治とヘンリー・ソローにみられる思想的類似点」では、賢治とソローが、いずれも、アメリカ超絶主義の先駆者とされるラルフ・エマソンの著作から影響を受けたことに着目し、影響の様相について分析した。賢治については、同時代の日本におけるエマソンの流行に呼応してエマソンのどの著作に接したかという実証的考察を含めた。ソローについては、個人的に親しくエマソンと交友したこともあって、直接的に大きな影響を受けたが、やがて、部分的に独自の考え方を展開し始めたという点にも注目し、両者の自然観の相違にも言及した。その上で、人間の精神は本来、「大霊」(Over-Soul)という超越的な宇宙的原理につながっているといたエマソンの汎神論的な考え方を両作家がどのように受け止め、どのように著作に反映させたかということについて考察した。

第二章「野性と本能」では、人間の中に存在している野性や動物的本能、肉食忌避、自然と文明、といった要素について両作家の考え方の共通点と相違点を考察した。考察の結果、例えば賢治は丘浅次郎の『進化論講和』で説かれる「人間は獣類の一種である」という考え方やアニミズム的な考え方に影響を受けて、動植物と人間は対等のものであると常に意識していたことを確認した。童話「鹿踊りのはじまり」では、主人公の嘉十が、山道で出会った鹿の群を観察しているうちに、鹿たちの話し声が聞こえるようになるが、そこでは人間と自然の境界線が取り払われる様相が描写されていると結論づけた。一方、ソローの場合は、クッタードン山に広がる原生自然を、人間を寄せつけない自然の例として描写するが、そこでは、人間と自然の間に境界を想定する認識論がうかがえる、と結論づけた。また、ソローについては、関心を待ち続けたアメリカ・インディアンとじかに接する機会を持ったことで、人間における本能の働きについての認識を深めたということを確認した。

第三章「法」と実践」では、自然の法則性についての両作家の考え方を確認し、両作家が自然から学んだことをどのように日々の実践につなげていこうとしたかということについて考察した。その結果、両作家とも、自然から人間の倫理の手本となるものを学び取ろうとする自己修養的な態度を持ち合わせていたことが確認された。その上で、賢治の場合は、法華経徒として、法華経の教義における法則性を思考の中心に置き、個々人の問題よりも、社会の調和に強い関心を寄せ、また「農民芸術概論綱要」にあるように「世界がぜんたい幸福」になるように望んでいたが、具体的な行動として近隣の農民の生活の向上を支えるために「羅須地人協会」を立ち上げているという、その実践性に注目した。ソローの場合は、自然に近づくためのウォールデンにおける非文明的な独居生活の実験や、奴隷制反対運動を始めるよう、著作を通じてアメリカ人に訴えるなどといった実践が見られるが、どちらかといえば、具体的な社会的実践そのものよりも、そうした実際の行動を始めるための条件となる個人の内部の精神的覚醒をうながすことに重きを置いていたことを確認した。

結論として、両作家はいずれも自然に親しみ、自然から学べる事柄は人間の倫理的な面にも示唆を与えうると確信し、そのことをフィクションあるいはノンフィクションの形式の著作を通して表明したと強調した。著作から読み取れる両作家の自然観や自然と人間の関わりについての考え方は、部分的には相違点があるが、両作家は、動物間の進化の度合いの違いや人間社会の階級の違いを越えた自由を求める態度において共通点があり、とくに、人間は自然と調和して生きるべきであると考えていた点が重要な共通点であると強調した。